

大和郡山市文化財調査概要18

治道遺跡

小北地区発掘調査概要報告書



1990.3

大和郡山市教育委員会

例　　言

1. 本書は、大和郡山市横田町263-1外2筆で実施した「治道遺跡」の発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、大和郡山市（仮称）治道地区公民館建設事業を契機とし、その事前調査として実施した。
3. 調査期間は、1989年10月27日～同12月25日まで、調査面積は約950m²である。
4. 現地調査は、以下の組織で実施した。

〔現地調査〕

（調査員） 山川均（大和郡山市教育委員会）

（補助員） 御宮司和史（関西学院大学）・下大迫幹洋（奈良大学）・武田浩子

（作業員） 岸田勝信・崎山庄勝・堀川正治・米田利男・市井義治・杉山典三・奥井初代・米田郁子・城愛子・喜田美寿子・喜田政子

（事務一般） 大和郡山市教育委員会 社会教育課（課長 保田雅史）

5. 本概報作成は、以下のメンバーで行った。

〔執筆〕 山川　均（I～IV章）

　　福田さよ子（V章）

〔トレース〕 藤岡英礼（高野山大学）・下大迫幹洋・竹内直子（京都女子大学）・加藤洋子・山川均・濱口芳郎

〔写真撮影〕 山川均（遺構）・濱口芳郎（遺物）

〔編集〕 山川均

6. 現地調査ならびに概報作成に際し、下記の方々より貴重な御教示、御助言を頂きました。記して感謝いたします。

　　藤田三郎（田原本町教育委員会）

　　中井一夫（奈良県立橿原考古学研究所）

　　寺沢　薰（　　　〃　　　）

　　関川尚功（　　　〃　　　）

7. 表紙等の挿図は竹内直子、下大迫幹洋の両君によるものである。

本文目次

I 調査の契機および経過	1
II 位置および環境	1
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1
III 調査の概要	3
1. 調査方法	3
2. 経緯	3
3. 遺構	3
4. 遺物	6
IVまとめ	8
V 付章	10

図目次

図1 調査地および周辺の遺跡	2
図2 基本土層柱状図(1/10)	3
図3 第1トレンチ遺構平面図(1/100)	オリコミ
図4 第2トレンチ遺構平面図(1/100)	オリコミ
図5 SD-01土層断面図(1/40)	3
図6 第2トレンチ南面北壁土層図(1/40)	4
図7 SD-03土層断面図(1/40)	5
図8 SK-01実測図および木枠部分断面図(1/20)	6
図9 出土遺物実測図	7

図版目次

図版1 1 調査区全景(真上より)	
図版2 1 第1トレンチ全景(南西隅より)	
2 SD-01完掘状況(西より)	
図版3 1 SD-01完掘状況(東より)	
図版4 1 SD-02完掘状況(北より)	
2 SD-03完掘状況(南より)	
図版5 1 SK-01木枠上面検出状況(北斜め上より)	
2 同上 断ち割り状況(北より)	
図版6 出土遺物写真(土器)	
図版7 出土遺物写真(木製品)	

I 調査の契機および経過

今回の調査は、大和郡山市が建設を予定している（仮称）治道地区公民館の建設に先行して実施したものである。該地周辺は從前より奈良～鎌倉時代の遺物散布地としての認知がなされていた（市遺跡地図NO.34）が、試掘も含めて当該散布地内で発掘調査が行われたことはなく、今回が初の調査となった。

調査は、まず対象地に地下構造有無確認のためのトレンチ（幅4m）を東西に配した（1989年10月27日～11月15日）。その結果、良好な包含層および地下構造の存在を確認したので、同年11月16日より本調査を実施し、同年12月25日に現地調査を終了した。

なお、遺跡名は治道遺跡とする。

II 位置および環境（図1）

1. 地理的環境

大和郡山市の中央やや東よりを南北に貫流している佐保川は、市域の南端で大和川（初瀬川）と合流する。佐保川は郡山市域内できなり広範な氾濫原を形成しており、それは東西幅で約1.2kmにも及ぶ。川は本来、この氾濫原内を蛇行しつつ流下していたものと推定されている。

佐保川は、市域内で春日断層崖からなる山地を開拓して流れる小河川（主なもので北から地蔵院川、菩提仙川、高瀬川など。主流は菩提仙川で、他の2つは菩提仙川の形成した扇状地の扇側部を流れている。）と合流する。これらの河川は旧菩提仙川が形成した扇状地上において、近世の治水事業によって人工堤防により流路を固定されているのである。本来の河道（菩提仙川旧流路）はこの扇状地（「菩提仙川扇状地」と称する）を鳥趾状に網流していた。この菩提仙川扇状地は、市域内ではごく緩傾斜の扇状地となっている。扇状地内には多くの遺跡が存在するが、それについては続章で述べる。

今回の調査地は、菩提仙川扇状地の扇端付近に立地している。

2. 歴史的環境

本項では、先述の菩提仙川扇状地、ならびに東に接してある段丘上の遺跡を一覧表ならびに図上において示した。それは、この地域がひとつの地形的単元であると共に、遺跡の分布についてもひとつの単位地域となり得るという筆者の仮説に基づくものである（詳細は拙稿によられたい。）。

さて、この地域において、最も古く、かつ継続的に営まれる遺跡は（表採資料などによる範囲の不確定な要素を除く）、美濃庄～若槻遺跡にかけての範囲（図1、トーン部分）である。これが、本地域における拠点的集落となるものと思われる。

今回調査の行われた治道遺跡は、弥生時代中期より開始する遺跡である。それは、弥生時代後期に環濠の埋没をみると、いったん廃絶するようである。そして、それと軌を一するように、北に発志院遺跡が登場する。ただし、それは生産域（つまり耕地）的な要素を色濃くもつものであり、同時期の主要な居住域は美濃庄周辺、ならびに山手の和邇・森本遺跡（9）に移る。これは、この

時期において生産域、ならびにそれに直接たずさわる階層の居住域と、支配者層の居住域が分離したことを示すものかもしれない。

そうした意味において、櫻本高塚遺跡（25）の存在は注目される。ここでは、祭祀性の強い獨立柱建物と、付属の堅穴住居が検出された。生産と直接結び付かない集団が段丘上に居住したという点で、きわめて示唆的な遺跡といえる。

なお、古墳時代には段丘、丘陵上に多くの古墳があい次いで築造されるが、なかでも東大寺山古墳（12）や赤土山古墳（14）、和邇下神社古墳（13）などは規模から考えて、この地域（菩提仙川扇状地を中心とした地域）を統括した盟主たちの墓と考えられる。



図1 調査地及び周辺の遺跡

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	治道遺跡	弥（中）～古（前）	15	岩尾山古墳	古墳（後）
2	稗田・若槻遺跡	繩（晚）～中世	16	上殿古墳（消滅）	“ “
3	美濃庄遺跡	弥（前）～中世	17	古 墳	“ “
4	発志院遺跡	弥（中）～中世	18	ベンショウ塚古墳	“（中）
5	横田下池遺跡	繩（後）	19	黄金塚古墳	飛鳥
6	池田遺跡	弥～古	20	散布地	弥生・鎌倉
7	堀田池遺跡	繩	21	“	弥生～室町
8	森本遺跡	弥～古	22	“	弥生～古墳
9	和邇・森本遺跡	弥（中）～古	23	墓山古墳	古墳（中）
10	東大寺山古墳群	弥（後）～古	24	柿本寺跡	奈良
11	東大寺山遺跡	弥（後）	25	櫻本高塚遺跡	古墳
12	東大寺山古墳	古墳（前）	26	森本寺山遺跡	“
13	和邇下神社古墳	“（”）	27	山町銅鉛出土地	弥生～
14	赤土山古墳	“（”）			

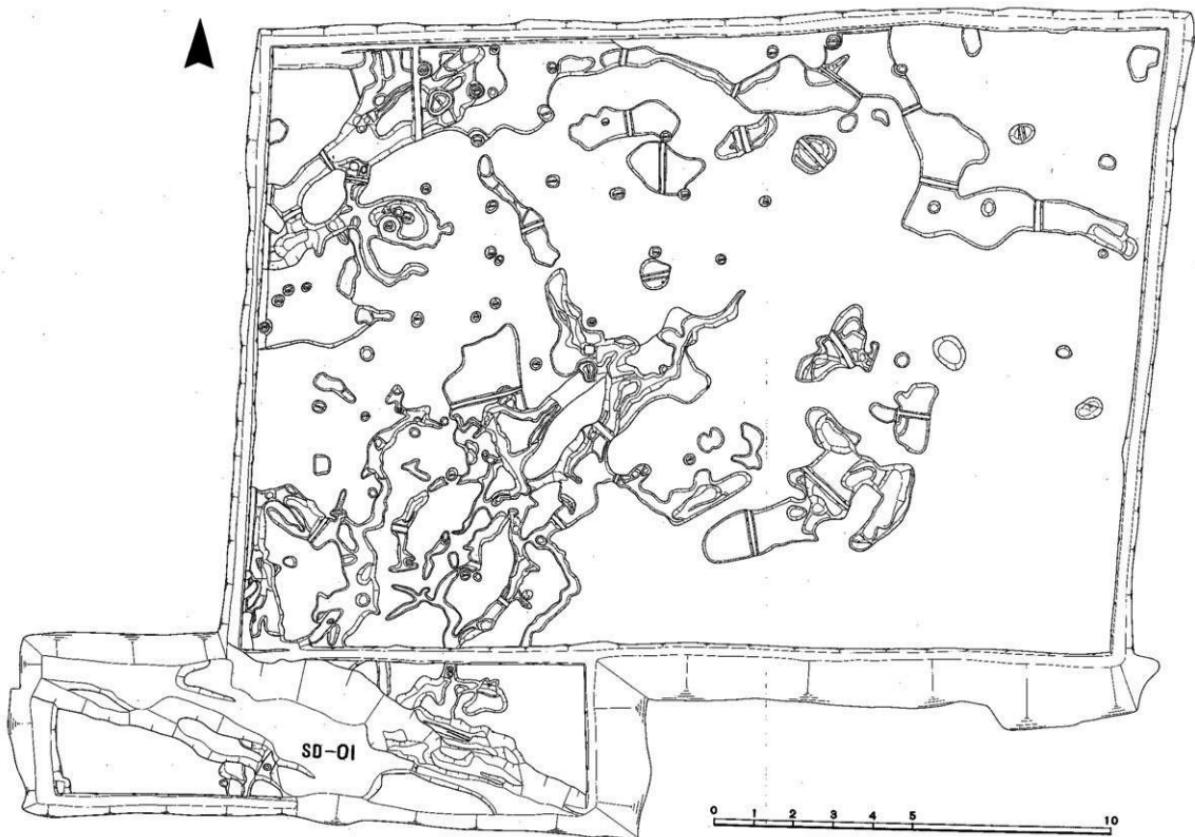


図3 第1トレンチ造橋平面図 (1/100)

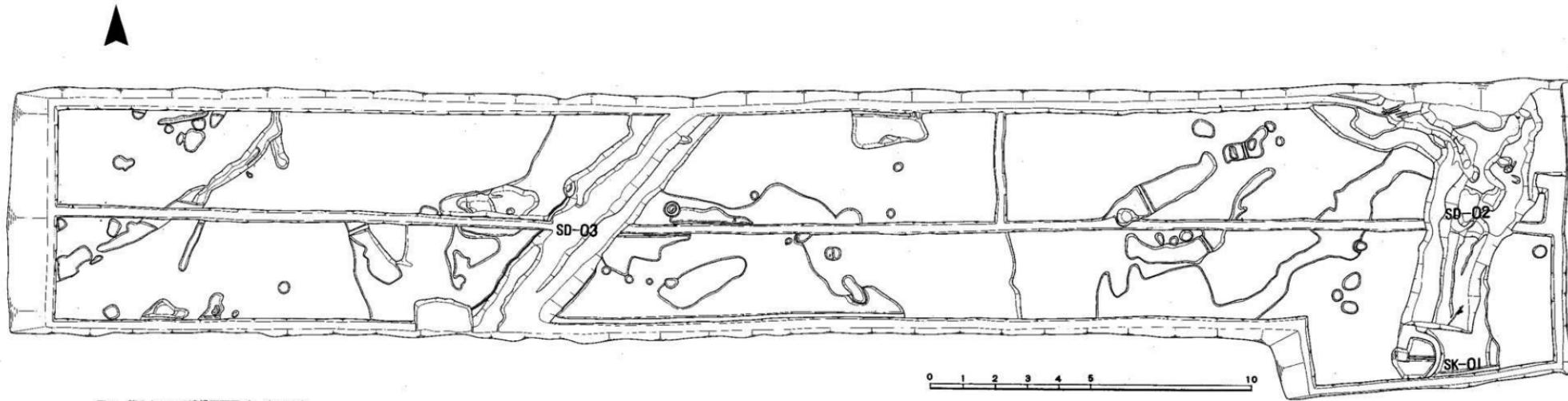


図4 第2トレンチ遺構平面図 (1/100)

III 調査の概要

1. 調査方法

調査は当初、幅4mのトレンチを東西方向に配し、地下構造の有無確認を行った。その後、構造の検出状況にあわせて、可能な範囲でトレンチを拡張した。ただし、調査対象地のほぼ中央を用水路が南北に通っていたため、調査はやむなく東・西2つの調査区に分けて実施することになった。このうち東側を第1トレンチ、西側を第2トレンチと称する。調査面積の総計は約950m²である。

2. 層序(図2)

今回の調査における基本的な層序を図2に示した。I層は黄灰色を呈するシルト質粘土層である。今回は当該層上面において構造の検出を行った。II層は濃褐色の中～細粒砂層。部分的にシルト質の粘土が狭在する。古墳時代前期の遺物包50.462含層である。

III層は茶灰色の粘土層である。平安～鎌倉時代に至る遺物を包含する。IV層は現在の水田耕土である。

I～II層は氾濫性堆積土層である。ることは、後述のSD-01・02の埋没(氾濫による)とも共通の要素である。遺跡周辺は河川による冲積作用が比較的盛んであったらしい。

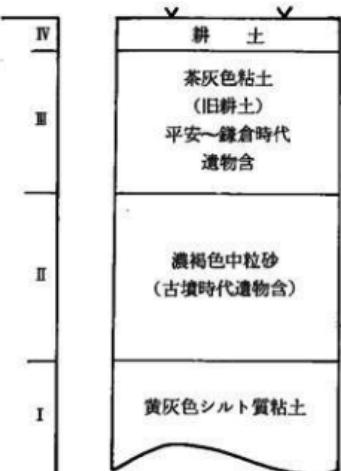


図2 基本土層柱状図(1/10)

3. 構造(図3・4)

SD-01 第1トレンチ西南隅で検出した西北～東南方向の溝(濠)状構造である。断面形状はV、あるいはU字形を呈する。幅は最大で約4m、深さは約1.5mである。溝内の堆積土は細～

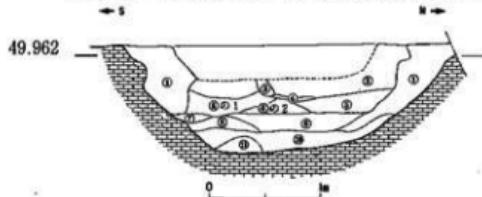


図5 SD-01 土層断面図

- ① 暗灰色シルト質粘土
- ② 棕色砂層
- ③ 灰色微砂層
- ④ 茶色粗砂層
- ⑤ 淡灰色シルト混じり砂層
- ⑥ の1 淡灰色粗砂層
- ⑥ の2 " 粗石層
- ⑦ 灰色粗砂層
- ⑧ 暗灰色シルト混じり微砂層
- ⑨ 淡灰茶色粘土混じり細砂層
- ⑩ 灰色シルト混じり砂層
- ⑪ 暗灰色細砂層
- ⑫ 暗綠灰色シルト層

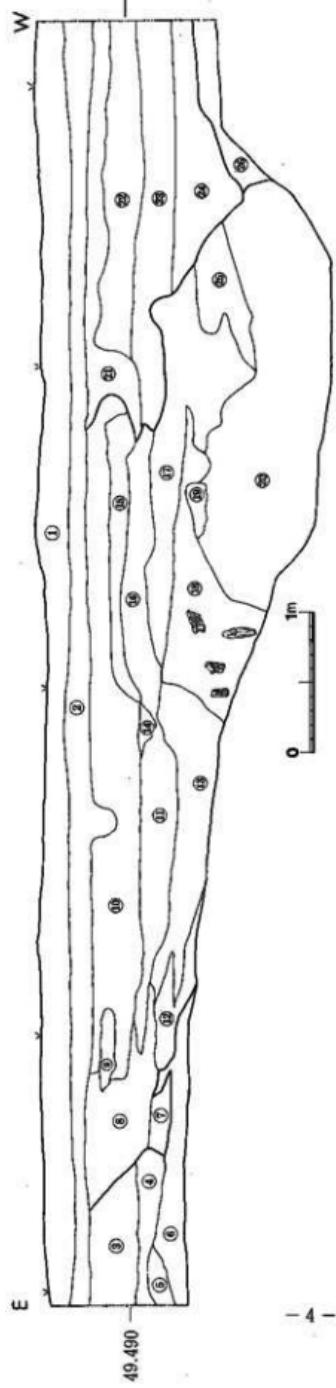


図6 第2トレンチ南面北壁土層図(部分=SD-02 土層図・1/40)

- | | | |
|----------------|---------------|---------------|
| ① 暗茶褐色粘質土層(耕土) | ⑧ 灰色シルト層 | ⑯ 褐色細砂層 |
| ② 灰色粘質土(底土)層 | ⑨ 明茶色粘土混じり細砂土 | ⑰ 淡茶色細砂層 |
| ③ 暗褐色粗砂層じり粘土層 | ⑩ 單褐色粗砂層 | ⑱ 淡茶灰色粗砂層 |
| ④ 淡茶色シルト質粘土層 | ⑪ 暗茶色粗砂層 | ⑲ 灰色粘土混じり粗砂層 |
| ⑤ 暗灰色粗砂層 | ⑫ 暗灰色粘土層 | ⑳ 灰白色粗砂層 |
| ⑥ 暗灰色粘土層 | ⑬ 淡茶灰色砂層 | ㉑ 淡茶灰色粘土混じり砂層 |
| ⑦ 單灰茶色粘土混じり砂層 | ⑭ 茶灰色砂層 | ㉒ 明茶色粗砂層 |
| | ⑮ 灰色シルト層 | ㉓ 灰色シルト層 |
| | ㉔ 單灰色シルト質粘土層 | ㉕ 淡灰茶色砂層 |
| | ㉖ 淡灰茶色粘土層 | ㉗ 灰綠色粘土層 |

中粒砂、部分的にシルトから成り、溝が比較的短期間のうちに河川氾濫等の要因によって埋没したこと示している(図5)。なお、このことは後述のSD-02や03とも共通している。

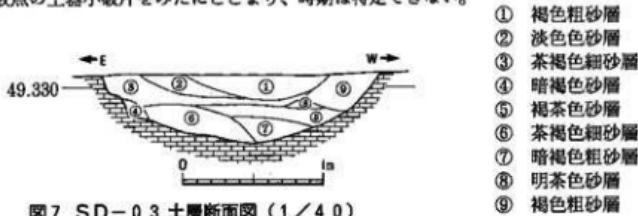
出土遺物には弥生時代中～後期の土器および木製品がある。また、自然遺物としては多量の自然木、カシ、クリ、クルミ等の堅果類などがある。

SD-02 第2トレンチの東端で検出した。断面形状はV字型を呈する。幅は3m前後でSD-01よりやや細い。深さは検出面より1.5～1.8mを測る。また、検出した部分は北の端で直角に折れ曲がっている。なお、屈折部位には板材を杭で止めた護岸施設がみられた。

溝内の堆積土は図6に示すように、SD-01のものと類似する。やはり河川氾濫等の要因によって短期間に埋没したものと思われる。なお、出土遺物もSD-01とよく似た様相を示す。図9～7は、SD-01の出土遺物とSD-02のものが接合した資料である。

なお、SD-01とSD-02は調査区の北方でほぼ直角に交差する位置関係にある。ただ、残念ながら今回は調査区の制約によって交差部分の調査は断念した。

SD-03 第2トレンチ中央付近で検出した溝状の遺構である。幅約2.5m、深さは約0.5mを測る。規模においてはSD-01・02とまったく異なる、浅い溝である。堆積土は粗～細砂より成り、埋没状況はSD-01・02と同じように河川氾濫によるものと思われる(図7)。出土遺物は数点の土器小破片をみたにとどまり、時期は特定できない。



SK-01(図8) 直径約1.5m、深さ約30cmの円形の土坑である。SD-02埋没後に掘削されている。土坑の西隅には杉の板材4枚を組み合わせた施設(1辺約30cm)がある。板の上端は腐食によって失われているので、本来の高さは不明であるが、残存高は約45cmを測る。底面のレベルは統一されており、底板は存在しない。

なお、土層断面の観察に基づけば、SK-01はいったん埋め戻された後、再度掘削して木棒施設を設けている。出土遺物としては、布留式期の土師器が比較的豊富に出土した。遺構の性格等は不明である。また、掘削深度より考えて井戸の可能性は少ない。

その他の遺構 第1トレンチにおいて特に多く認められるピット群(直径30～50cm)は、堅穴住居に伴う柱穴群としての可能性が強いものである。周壁溝その他の施設は遺在していないが、それは河川氾濫等による下刻によって消滅したものと思われる。遺構検出面自体もシルトや中～細砂層面なので、侵食は比較的容易に進行したものと思われる。

なお、第1トレンチ内に顯著に認められる溝状のオチコミは、河川氾濫の際に形成された「流水痕跡」である。方向的に、SD-01に収束されており、その事実はこうした溝(濠)が微高地縁辺を選んで掘削されていたことを示すと共に、洪水時には多量の土砂が溝内に流入したことがわかる。

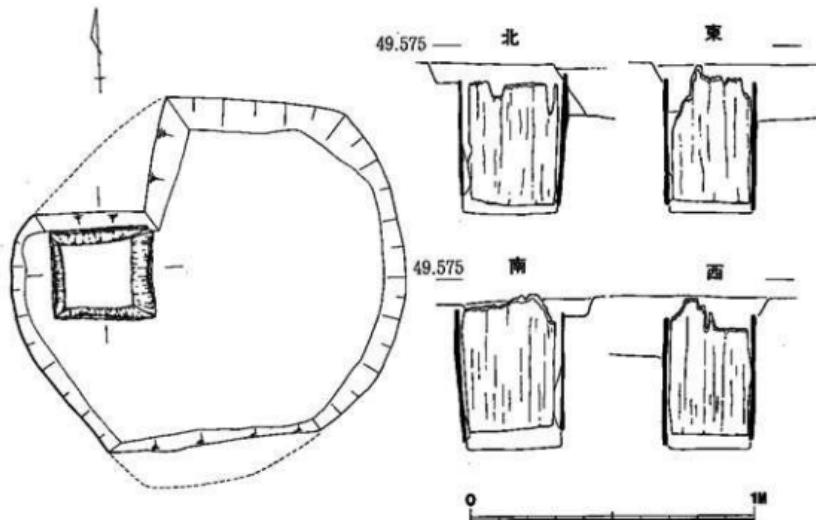


図8 SK-01実測図及木枠部分断面図 (1/20)

4. 遺物 (図9)

SD-01・SD-02出土遺物 両者の出土遺物は接合関係をもつものもあり、時期的にも併行するので、ここでは一括してとりあげる。4は、鉢である。体部の調整はスリナデ (I C a)、底部には押捺A手法がみられる。淡茶褐色を呈し、内面には黒斑を有する。胎土は各鉢物の平均的な混入をみる。粒度も小さい。器高6.8cm、口径12.2cm、底径4.1cmを測る。5は、高杯である。脚部には4方向からの穿孔がある。杯部上半は、欠損。脚部の調整は外面をミガキA手法、内面では押捺A、およびスリナデヨコ I C a (?) 手法がみられる。なお、粘土組の接合痕も認められる。杯部は外面をミガキB、内面はスリナデヨコ I C a (?) 手法により調整する。赤茶色を呈し、器表面はややもろい。胎土中には石英、長石の粗粒のほか、赤色酸化土粒の細粒が多く含まれる。据径9.8cmを測る。

6も、高杯である。脚部に3方向からの穿孔がある。体部、および脚据部は欠損。調整は外面をミ

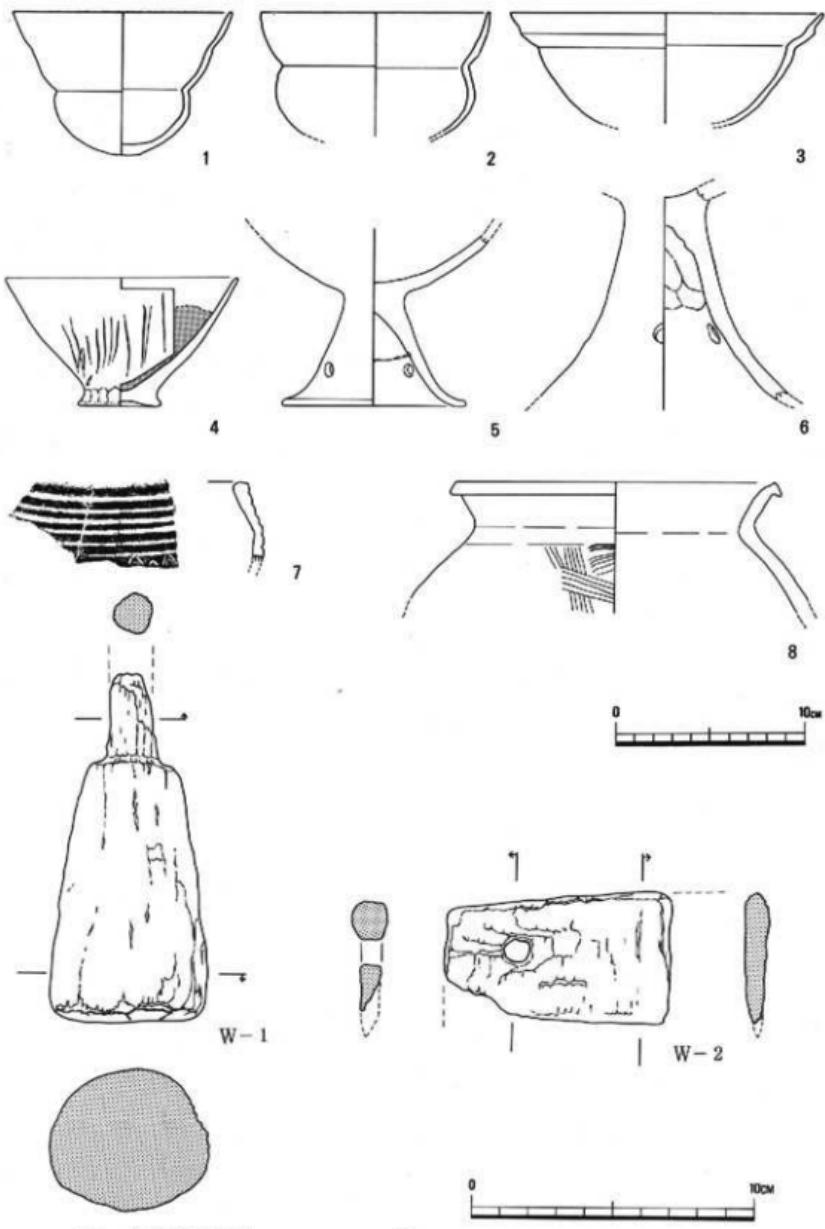


図9 出土遺物実測図

ガキA、内面は押捺AおよびスリナデヨコBがみられる。淡褐色を呈し、比較的堅緻。胎土中には角閃石、黒雲母が多い。7は、大型の細頸壺の破片である。SD-01とSD-02から出土した資料が接合した例である。6条の凹線文と、波状文の一部が観察される。淡褐色を呈し、胎土中には石英、長石のほか、チャートが目立つ。胎土組成は比較的緻密である。なお、今回報告したものは、この1例のみが弥生時代中期後半の資料で、他のもの（4～6.8）は後期後半の資料である。8は、広口壺である。体部以下は、欠損。調整は外面をスリナデICA、肩部スリナデIAa、内面は口縁部スリナデヨコb、肩部押捺B。色調は淡褐色を呈する。胎土は石英、長石、赤色酸化土粒が目立つほか、黒雲母の微細粒も多く含む。口径17.0cm（復元）、頸径15.0cm（同）。W-1は、砧形の木製品である。（材質についてはV章参照。）心持材を用いている。残存長度12.8cm、直径は本体5.5cm、軸部1.8cm。W-2は、木包丁である。図示した右半及び刃部を欠損する。直径8mmの穿孔がある。なお、穿孔は両側よりなされている。残存する長さ8.1cm、幅4.7cm。厚さは最大で1.3cmを測る。

SK-01出土遺物 SK-01内出土土器は、大半が木枠内よりの出土である。ここに紹介する3例もいずれも木枠内より出土した。

1は、小形丸底壺である。調整は外面は口縁部をスリナデIB（？）体部はミガキAを施す。内面は口縁部スリナデICA、体部ケズリA。色調は赤茶色を呈する。黒雲母の微粒を多量に含む他は、鉱物はあまりみられない。特に、角閃石は全くみられなかった。口径11.6cm（復元）、頸径7.0cm（同）、胸径7.2cm（同）、器高は7.6cmである。

2も、小形丸底壺。外面は体部上半までミガキA手法によって調整し、以下はケズリAを施す。内面は口縁部をスリナデヨコIB、体部にはスリナデICA（？）を施している。色調は淡褐色を呈し、胎土は緻密で鉱物をあまり含まないが、黒雲母の微粒がやや多く含まれる。口径12.2cm（復元）、頸径9.9cm（同）、胸径10.6cm（同）を測る。

3は、二重口縁をもつ小形丸底鉢である。口径がおおきく器高を上廻る。調整は内・外面ともに口縁部スリナデヨコIB、体部はミガキAを施す。ただし、体部内面はミガキ以前にケズリが施され、器厚を減じている。

1～3ともに布留1様式期の資料である。

IV まとめ

今回の調査における最大の成果は、SD-01およびSD-02の検出である。今回はそれらのごく一部を検出したに過ぎないが、両者はその規模、および形状、時期等より考えて集落を壊する環濠の一部である可能性がきわめて高いものといえる。この場合、SD-01が環濠の“本体”であり、SD-02は環濠内の水を外へ逃がす排水溝的な役割を荷ったものと思われる。

微地形的にみるとならば、環濠集落は調査地の北方に向けて展開していたものと思われる。すなわち、遺跡の中心は現在の治道小学校のあるあたりであろう。

つぎに、環濠集落の時期については、今回出土した遺物で判断するならば、弥生時代中期（後半）～後期後半にかけて存続した集落と考えられる。この集落がどの集落より派生移転し、廃絶の後にどの集落に収歸（移転？）されたものかは、今後の調査によって慎重に判断すべき問題であるが、治道遺跡の近在では、発志院遺跡（図1-4）が、治道遺跡における環濠集落の廃絶と軌を合わせて出現することは、一応注目してよいものと思われる。（II-2章参照）。また、SK-01にみるよう、一定の空白期間の後、該地に再び人間が居住した可能性もある。

ともあれ、今回の調査によって大和郡山市域においても環濠集落が存在することがほぼ確認された。このことは、とかく大和においては中～南部域偏重に陥りがちであった該期の研究者たちの目を、大和北部域にも向けさせる絶好の機会となり得るものと思われる。そうした意味において、研究者、専門家による周辺の遺跡をも含めた今後の発掘調査及び研究の進展を強く望むと共に、我々自身も銳意それらにとり組む所存である。

<注>

- ① 武久義彦「地形分類図」「土地分類基本調査 桜井」奈良県企画部開発調整課、1982
- ② 山川均「地形的条件からみた遺跡の立地および分布状況の研究」「文化財学報 第7集」奈良大学文学部文化財学科、1990
- ③ 藤井利章『発志院遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第41冊、奈良県立橿原考古学研究所、1980
- ④ 中井一夫・松田真一『和邇・森本遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第45冊、奈良県立橿原考古学研究所、1983 および松田真一ほか『和邇・森本遺跡II』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第58冊、奈良県立橿原考古学研究所、1989
- ⑤ 池田保信『森本高塚遺跡発掘調査報告』埋蔵文化財天理教調査団、1989
- ⑥ 遺物に関する記述は、寺沢薰ほか『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第49冊、奈良県立橿原考古学研究所、1986にほぼ準ずる。

木質遺物の樹種同定

福田 さよ子

1.はじめに

今回、樹種の観察・同定をおこなったのは、奈良県大和郡山市横田町に位置する治道遺跡より出土したもので、木庵丁（遺物NO.W-2）とキヌタ形木製品（遺物NO.W-1）の2点である。

これらはともに弥生後期の環濠と考えられる遺構より出土し、どちらもほぼ完形に近い。

以下に観察の結果を記す。

2.試料作製

今回観察した遺物は、完形に近いものであるため、ブロックを採取することは避け、遺物から直接切片を採取した。切片採取は両刃の安全カミソリを使用し、ハンドセクションによりおこなった。

遺物から直接切片を採取する場合には、遺物に与える損傷を最小限にとどめるために、木口・柾目・板目の正確な面が出来なかったり、三断面が揃えられない場合がある。今回も木庵丁に関しては、前記の理由から板目面の切片を採取しなかった。

採取した各断面切片は、70%・90%・fina1の各エタノールとブタノールのアルコールシリーズにより脱水処理をおこなった後、キシレンで透徹し、ビオライト封入して永久プレパラートにしあげた。できあがったプレパラートは生物用普通光顯微鏡で観察・検討し、樹種の同定をおこなった後、顕微鏡写真を撮影した。

3.観察と同定結果

木庵丁（遺物NO.W-2）クヌギ *Quercus acutissima* Carruth. (図版7-1・2・3)

環孔材で、道管は単独に存在する。孔圈部の大形の道管が、内腔にチロースを多く有する様子がよく観察できる。孔圈外の 小道管は壁が厚く、放射方向に並ぶ。1の写真の左側に広放射組織が確認できる。柾目面では、孔圈部大道管のせん孔板が単せん孔であることや、すべて平伏細胞から成る同性の放射組織を観察することができる (図版7-2・3)。また、板目面は観察できなかったが、木口面で單列放射組織の存在も確認した。

以上の所見からクヌギと同定した。

クヌギは暖帯に分布する落葉高木で、材は強韌、耐朽性や保存性が高く、現在も用途は多様である。

キヌタ形木製品（遺物NO.W-1）ツバキ *Camellia japonica* L. (図版7-4・5・6)

道管の非常に小さい散孔材である。1～3列前後の放射組織が木口（4）と柾目（6）でよく観察できる。道管のせん孔は階段状で、放射組織は平伏細胞と直立細胞から成る異性である（5・6）。

以上の所見からツバキと同定した。

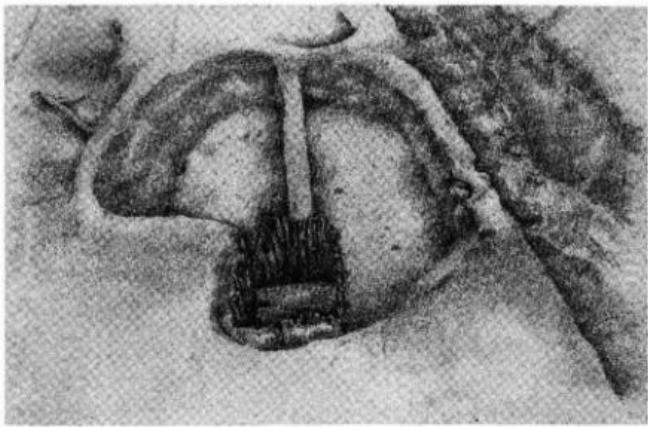
ツバキは暖帯に広く分布する常緑高木で、材は重硬で強韌、緻密で耐朽性の高い良材である。

今回、この観察報告をまとめにあたり、京都大学名誉教授 島地 謙先生に御指導・御教授を得ました。また大和郡山市教育委員会の山川均氏には、貴重な遺物を観察させていただく機会を与えいただきました。その他にも下記の方々の御助力・御指導を得られましたことを、文末ではありますかが、記して感謝の意とさせていただきます。

京都大学木材研究所 林昭三先生 奈良県立橿原考古学研究所 今津節夫氏・宮原晋一氏

<参考文献>

- 「図説木材組織」島地 謙・伊東 隆夫 地球社 1982
「鬼虎川遺跡調査概要 I」遺物編 木製品 IV.出土木製品の樹種 林 昭三・島地 謙・植田 弥生(財)東大阪市文化財協会 1988
「原色日本植物図鑑 木本編II」北村 四郎・村田 源 保育社 1983



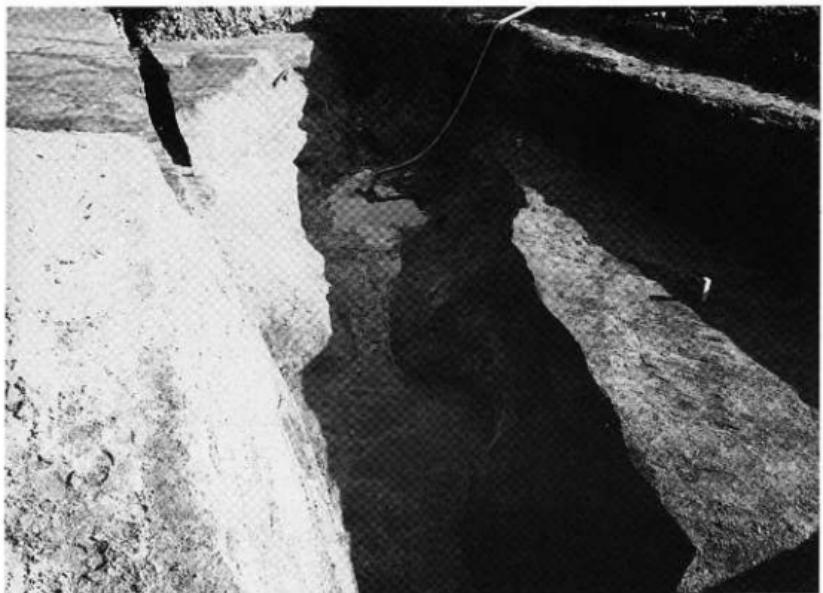


1. 調査区全景（真上より、左が北）

図版2 治道遺跡



1. 第1トレンチ全景（南西隅より）



2. SD-01 完掘状況（西より）

図版 3 治道遺跡



1. SD-01 完掘状況（東より）



1. SD-02 完掘状況（北より）



2. SD-03 完掘状況（南より）

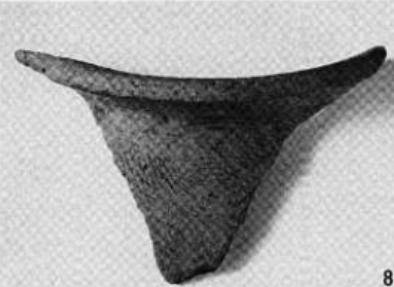
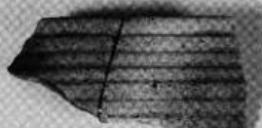
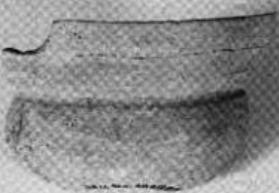


1. SK-01 木枠上面検出状況（北斜め上より）



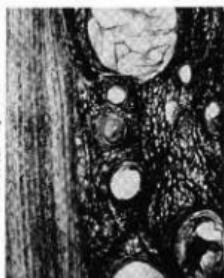
2. 同上断ち割り状況（北より）

図版 6 治道遺跡（遺物）



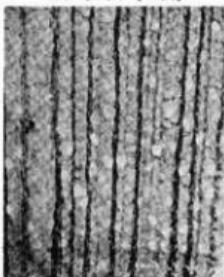
図版7 治道遺跡（遺物）

クヌギ
（木脛）



1. 木口 ($\times 50$)

ツバキ
（キヌタ型木製品）



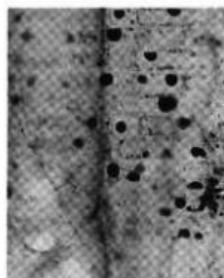
4. 木口 ($\times 50$)



2. 柱目 ($\times 100$)



5. 柱目 ($\times 200$)



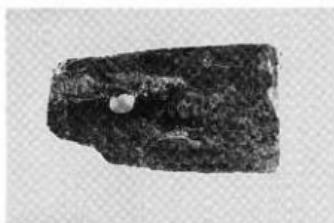
3. 柱目 ($\times 200$)



6. 板目 ($\times 200$)



W-1 (キヌタ形木製品)



W-2 (木包丁)

平成2年3月31日 発行
大和郡山市文化財調査概要18
治道遺跡小北地区発掘調査概要報告書
編集 発行 大和郡山市教育委員会
大和郡山市北郡山町248-4
印刷 有限会社 金井平版印刷
大和郡山市北西町227

